

大学英語プレゼンテーション教育を再考する： 主要テキストに関する一考察

田村 朋子・細田 菜穂子・
星 久美子・野村 佑子

Abstract: This study aims to reconsider English presentation classes at university level in Japan. For this purpose, the study analyzed English presentation textbooks used in Japanese universities. The findings of the study show that the textbooks mainly cover basic presentation skills such as physical (eye contact and gestures), oral (voice inflection / intonation) and visual (creating and explaining slides) aspects. However, the majority of the textbooks do not focus on brainstorming and researching, which help students to enrich the content of the presentation. This indicates that students are not taught the importance of developing and organizing their ideas and the ways of expressing them, and as a result, they are not able to communicate their thoughts logically and clearly in their presentations. This paper emphasizes the necessity of fostering students' abilities to organize information and to build up their ideas in shape. The paper finally suggests how to improve the education of English presentation classes at universities in order to cultivate human resources so that students can play an active role in the global world.

Keywords: *English presentation, textbook analysis, organizing information, developing ideas*

1. はじめに

立教大学では、「グローバル社会に対応した総合的かつバランスのとれたコミュニケーション能力を育成することを目的」として、1年次の必修英語科目のひとつに、英語プレゼンテーションが設けられている。全学共通カリキュラムの履修要項によると、英語プレゼンテーションのクラスの目標は、「構成法をはじめとしたプレゼンテーション・スキルの習得を集中的に行い」、「さらに、リーディング活動をとおして、社会問題や異文化理解等の様々なトピックについて情報収集し、それらの情報を利用して自分の意見を口頭で発表する」と記載されている(p.228)。実際にこの目標に沿った授業が行われており、執筆者が担当したプレゼンテーションの授業では、学生は構成法を学び、情報収集を行い、意見を発表する活動に従事しているが、うまく自分の意見が聴衆に伝わるようなプレゼンテーションには及んでいない。

ここに執筆者が担当したプレゼンテーションの例を紹介する。例えば、ディズニールランドの歴史がテーマであった場合、ディズニールランドの大まかな歴史を概観するにとどまり、ロゴがテーマであった場合、複数のロゴ(Starbucks, Apple, Olympic Emblem)とその意味を提示するのみである。ここで問題なのは、6分程度の短い時間では十分に展開しきれない大きなテーマを選んでいて、誰でもインターネットなどで簡単に調べられる事実を列挙しているにすぎない内容になっていることである。学生が興味のあることをさらに調べることは、学びの在

り方として正しいといえよう。しかし、自分が興味を持ったテーマについて論理的に展開できず、魅力的な表現となっていないことは問題である。たとえば、ロゴに見られる「経営理念」や、ディズニーランドの「歴史的一考察」といった専門分野でも扱われるような視点を論理的に発展させてこそ、発表者、聴衆にとって意義のあるプレゼンテーションとなろう。すなわち、聴衆に自分の意見や考えを明確に伝えるプレゼンテーションは、論理的な思考形成を経て、構成法や表現法などの知識を上手く活用した時初めて達成できると考える。このようなプレゼンテーションを実現可能にする教育を考えたとき、われわれ教員は具体的にはどのような指導をすればいいのだろうか、そもそも「大学教育のレベルで扱うべきプレゼンテーション」とは具体的にはどのようなものなのか、使用するテキストはこのようなプレゼンテーションを実現するのに十分な内容となっているのだろうか、という疑問が湧く。ここから、授業で使用するテキストを改めて調査し、そこでの結果と実際に行われているプレゼンテーションにはどのような因果関係があるのか（テキストを網羅すればよいプレゼンテーションを実現できるのか、できないとしたら何が必要なのか）を明らかにしなければならぬという認識に至った。このような問題意識とともに、2013年度初めに立教大学総長吉岡知哉氏が全教職員にあてたメールで掲げた「リベラルアーツの現代的再構築」と「真の国際人の育成」という二つの基本的な課題を念頭に置くならば、学生が幅広い知識を獲得し、思考力を養い、自己の考えを表現する力を身に着けることのできるプレゼンテーション教育こそが行われなければならない。これは本学だけでなく、日本の多くの大学で行われているプレゼンテーション教育、ひいては英語教育に共通する課題である。

2. 研究の背景

2.1 日本における大学英語プレゼンテーション教育の動向

日本における大学英語プレゼンテーション教育の先行研究の中で最も多いのは、英語教育にスピーチ・プレゼンテーションを導入することの利点・教育効果に関するものである。利点としては、プレゼンテーションは情報収集 (reading)、原稿作成 (writing)、発表 (speaking)、評価 (listening) と、さまざまな領域のスキルが必要とされるため、スピーキングはもちろんのこと、4技能を統合させ、英語力全般が向上する (上田, 1998; 飯田, 2012; 佐藤, 2006; 藤田, 山形 & 竹中, 2009)。教育効果としては、相互交流能力や、やる気を促進し (Hovane, 2009)、ひいては自律的学習者の育成や (Hovane, 2009; Munby, 2011)、教室内のラポールの構築に役立つといった報告がされている (Tsue&Kono, 2003; 飯田, 2012)。プレゼンテーションの評価に関するものでは、教師だけでなく学生同士の発表の評価 (peer-evaluation) も行うことで、学生の意見も取り入れたよいパフォーマンスが期待できることを示した Otoshi & Heffernen (2008) や、総合評価の高い発表が有する要素 (スライドなどの視覚の工夫、リハーサルの有無、複式呼吸発声法) を明らかにした奥崎 (2009)、他には、英文の読みにおけるストラテジーの選択や事前準備が本番のプレゼンテーションに与える影響について調査したもの (仁科, 桐村 & 吉村, 2013) もある。

また、プレゼンテーションをコミュニケーションとして捉え、英語力向上以外の能力についても視野に入れた研究がある。中西 (1991) は、大学レベルの英語教育に、米国の大学では必修科目となっているパブリック・スピーキングを導入するべきだと提案している。その理由のひとつに、パブリック・スピーキングは、「限られた時間 (5～10分程度) である主題 (topic) について自分の考えを簡潔にまとめ、聴衆 (audience) に効果的に提示する事が要求される」(p.12) ため、独創性や創造性が必要となり、コミュニケーション能力の向上に貢献すると主

張している。また、中西（1991）は、Prentice & Payne（1989）の主張するように、パブリック・スピーキングを学ぶことで、思考整理能力、文章表現能力、批判的思考能力、文献調査情報能力、聴解力、オーラルコミュニケーション能力を伸ばすことができると述べている。また、上田（1998）は、プレゼンテーションを行うことで、思考力や、自己の意見や考えを明確に論理的に表現する態度や能力の向上が期待できるとし、言語能力だけでなく、目標言語におけるスピーチの組み立て方、発表の仕方など広い意味でのコミュニケーション能力の向上が期待できるとしている。

以上の先行研究によって、大学における英語プレゼンテーション教育が思考力の育成に資する可能性は十分に示唆されているが、ただしそれが実際に実現できているという事例報告はない。英語授業にプレゼンテーションを導入する試みは比較的歴史が浅く、今後さらなる研究が必要な分野であると言える。

2.2 本研究の目的

前節から、より高度で内容的に価値のある発表にするための指導を視野に入れた指導方法の確立が必要であることがわかった。その試みのひとつとして、本研究は以下を目的とする。日本の大学で入手可能なプレゼンテーションのテキストを調査することで、大学英語プレゼンテーション教育でよく扱われる項目は何か、それらが大学教育の理念を反映したプレゼンテーションを実現させるのに十分なのかを明らかにし、よりよいプレゼンテーション教育にするために必要な項目を提案する。

3. 研究方法

2章で述べたように、本稿では第一に大学英語プレゼンテーション教育の現状の再確認を行う。現在大学で使用されており、日本国内で入手可能な英語プレゼンテーションのテキスト18冊（Appendix 1）を調査対象とし、各テキストが扱う項目を調べる¹⁾。

4. 調査結果：主要テキストが扱う項目の傾向

対象とした18冊のテキスト調査から、主要な英語プレゼンテーションテキストでは、以下の計7要素18項目のいずれかを含み、後述する一定の傾向を示すことが分かった。

(Physical aspects) (身体的要素)

- (1) eye contact：アイコンタクト
- (2) gesture：ジェスチャー
- (3) posture：姿勢（立ち方、手の位置）

(Oral aspects) (音声的要素)

- (4) pronunciation：発音
- (5) voice inflection/intonation：強勢の置き方

(Preparation) (準備方法に関する要素)

- (6) brainstorming：ブレインストーミング

1) 立教大学「英語プレゼンテーション1」の統一シラバスにおいて規定される、すべての受講者が必ず習得しなければならない項目を調査初期段階における着目点とした。

- (7) outlining : 要点整理
- (8) researching : 下調べ
- (9) audience analysis : 聴衆分析
- (Organization)** (プレゼンテーションの構成に関する要素)
 - (10) structure : プレゼンテーションの構成 (introduction, body, conclusion)
 - (11) transition/signpost : 説明項目移行時のサインの示し方
 - (12) type of presentation : プレゼンテーションの種類 (情報伝達型/問題解決型/説得型など)
- (Visual aspects)** (視覚的要素)
 - (13) creating visuals : 視覚資料の作成方法
 - (14) explaining visuals : 視覚資料の説明方法
- (Language)** (言語的要素)
 - (15) grammar : 英文法
 - (16) useful expression : プレゼンテーションによく使われる表現
- (Others)** (その他の要素)
 - (17) Q&A : プレゼンテーション後の質疑応答の仕方
 - (18) Feedback / evaluation : プレゼンテーションの評価方法

各テキストが上記の項目を扱っているか否かを確認したところ、表3を得た (Appendix 3)。本節では、扱っているテキストが少なかった要素および項目に焦点をあてる²⁾。

Oral aspects に関しては、pronunciation を扱ったテキストは5冊 (27.7%) のみであった。これに対し、voice inflection / intonation は10冊 (55.5%) のテキストが扱っていた。大学生が英語初学者でないことを考慮すると、すでにある程度習得済みである (と見なされる) pronunciation に比べ、voice inflection³⁾ / intonation のほうが重視されたことが推測される。ただし、voice inflection / intonation についても、その重要性を強調するにとどまるか、あるいはエクササイズが実践的でなかった。例えば、*Speaking of Speech* (McMillan) では inflection を付与することが多い語彙カテゴリーとして numbers, action words などを挙げ、サンプルとなる音声やリピートさせるエクササイズや、実際にセンテンスを読むエクササイズがあるが、そのトピックは、ある国の人口増加や歴史であり、学習者が強調して伝えたいこととして解釈しにくく、内容理解に基づいて強調したい箇所をマークするために voice inflection を使う、ということ体を得しにくい。

Language に関して、grammar を扱っているテキストは少なく (5冊 = 27.7%)、useful expressions を扱っているテキストが多い (16冊 = 88.9%)。これは、前述の oral aspects に関する分析結果にも見られたように、すでに習得済みであると (見なされる) 文法には焦点は置かれず、その知識を前提に、プレゼンテーション場面に多用される表現のみを列挙する傾向が分かる。

Preparation に関して、brainstorming を扱っているテキストは5冊 (27.7%)、researching を扱っているテキストは4冊 (22.2%) と少ない。これらの項目を盛り込まないことは、自身のアイデアを明確化し、それを裏付ける知識を得るなど、学生の思考形成を助けるプロセスを授業内では重視しない傾向があると読み取れる。Outlining については、扱っているテキストは10冊 (55.6%) であり、プレゼンテーション教育においてある程度、焦点が当たっている項目

2) 各項目について取り扱っているテキスト数が「少ない」とした基準の冊数は、分析対象全18冊の3分の1である6冊未満である。

3) Voice inflection の内容は既習と思われるが、用語として認知されていないと考える。

と認定可能だが、各テキストを詳細に観察すると、十分な取り扱いができていないかどうかには疑問が残る。*Dynamic Presentation* (ピアソン) のような、*Outlining* という項目を立てて、要点整理の意味を十分に説明し、有効なエクササイズを含んでいるものは少なかった。*Audience Analysis* については、その重要性を示したテキストが4冊 (22.2%) と少ない。プレゼンテーションはその目的や場面に、話し方や内容提示方法を合わせる必要があるはずだが、それを考慮しておらず、プレゼンテーションを「人前で話す場」という一般的な位置づけにする⁴⁾ ことで、基礎的な項目だけに焦点を絞っている場合が多い。

以上から、主要テキストでは、既習と見なされる項目や、ブレインストーミングや下調べのような内容を充実させ、論理的に構成する上で重要となる項目、聴衆に合わせて調整するといったコミュニケーションにおいて基本となる項目はあまり扱われず、プレゼンテーションにおいて最低限必要となるスキルにのみ焦点を当てていると言える⁵⁾。

5. 考察

本章では、前章で明らかとなった主要テキストから見る大学英語プレゼンテーションの傾向と、本研究が掲げる大学教育のレベルで扱うべきプレゼンテーションとを照らし合わせ、適切なプレゼンテーションの実現が難しい要因について説明し、目指すべき英語プレゼンテーションの在り方を示唆する。

5.1 主要テキストに見る大学英語プレゼンテーション教育の傾向と問題点の要因

4章の調査から主要テキストでは、既習と見なされる項目 (grammar や pronunciation)、内容を充実させ、論理的に構成する上で重要となる項目 (research や brainstorming)、プレゼンテーションの種類や聴衆に合わせて調整するといったより高度なプレゼンテーション能力 (types of presentation や audience analysis) に関わる項目が扱われることが少ないことが明らかになった。本節では、このことと実際の学生のプレゼンテーションが十分に行われない理由との関係について述べる。なお、本研究では既習と見なされる項目ではなく、後者2項目に焦点を当ててみる。

まず、プレゼンテーションに必要なプロセスを図1に示す。

このプロセスにおいてもっとも重要な点は Step 2 である。ここではテーマ決定の後、調査・情報収集して、着眼点を認定するステップを踏む。すなわち Step 1 のテーマ決定を Step 3 のプレゼンテーショントピックの決定と直結させないのである。これを実践することで、発表者独自の視点に焦点を当てた内容をプレゼンテーションできると考える。そしてここには、収集した情報を的確に整理し、その情報の中でもっとも興味深いのはどの情報か、その情報を用いて自分が何を伝えたいのかに思考を巡らせて、自分の考えを発展させる力が必要となる。

本研究が明らかにしたプレゼンテーションのテキストであまり扱われない項目は、図1の

4) テキストの introduction に相当する箇所を調べると、business または academic な場面に焦点を絞ったものもある一方、「人前で英語で伝える」(たとえば、“anyone who needs to make presentations in English (*Presentations in English: Find Your Voice as a Presenter*)” (裏表紙) や “to present their own idea clearly and effectively (*Dynamic Presentation* (ピアソン))” (裏表紙) という一般的な場を想定しているテキストが8冊あった (Appendix 2)。

5) このことは、テキストの構成を見るために章立てを調べた際に、スキルごとに構成されているものとプレゼンテーションのトピック (話題) ごとに構成されているものに分類できることがわかったが、11冊という半数以上のテキストがスキルごとの章構成であったこととも一致する (Appendix 2)。



図1 プレゼンテーションのプロセスと必要な能力およびスキル

Step 1 から Step 3 に必要な項目である。たとえば、Research の項目は Step 2 において情報収集をすることである。発表者は、インターネットや書籍など様々な資料を調べながら情報を集める。Brainstorming では、集めた情報の中からもっとも興味深いものを抽出する。この活動に関する項目に関して取り扱われることが少ないということは、発表者は Step 1 から Step 3 までの過程を意識的に行うことなく Step 4 と Step 5 という実践の場へ取り組むことになる。その結果、十分に整理されていない内容を漠然と提示するプレゼンテーションになるのではないだろうか。

また、聴衆分析を行うことは、ある情報を伝達することが目的であることを認識したうえで、聴衆に適した方法で伝えるという、コミュニケーションのもっとも基本的な部分を担う。これを考慮せずにプレゼンテーションの準備を始めると、最終的に仕上がるプレゼンテーションも焦点が定まらず、ただ何かを言っただけ、という結果になりかねない。

学生がよいプレゼンテーションを実践できない要因は、情報整理力や思考形成力の育成には焦点が当たっていないことにありと考えられる。プレゼンテーションの実践に直結するスキル (Step 4 と Step 5 に必要なスキル) は不可欠だが、これだけでなく、情報整理力や思考形成力の育成も視野に入れることで、プレゼンテーションのレベルを上げることが可能になると考えられる。

5.2 大学において目指すべき英語プレゼンテーション教育

1章で示したように、本研究は、現在の英語プレゼンテーションのクラスでよく目にするプレゼンテーションは、収集した情報を整理することなく漠然と提示するものが多く、十分に整理された内容について論理性を伴って発表者の視点から語る形にはなっていないことに問題点を見出した。たとえば、執筆者の担当クラスの学生が行った複数のロゴをテーマとしたプレゼンテーションでは、Starbucks、Apple、Olympic Emblem を取り上げ、それぞれが何を意味するのかを説明した。プレゼンテーションの構成はシンプルでわかりやすいものだったが、誰が調べても同様の情報を得られると感じられる内容であって、これによって発表者が何を伝えたのか、発表者にとって何が聴衆と共有すべき情報だったのかが、わからないプレゼンテーションとなった。これがたとえ、情報提供型のプレゼンテーションであったとしても、情報整理力・思考形成力が必要となる調査・情報収集および着眼点の認定 (Step 2) というプロセスを経て、その情報をどのような観点から見ているのかという発表者独自の視点を明確化し、それを聴衆と共有できるようなプレゼンテーションが行われなければならない。これを目標として設定した英語プレゼンテーション教育が必要である。

大学における英語教育の位置づけは、あくまでも〈手段としての語学力〉(主に語彙、イデ

イオム、発音といった言語知識を指す)であって⁶⁾、〈表現するための言語力〉(表現者が自身の中に(意識的または無意識的に)持つ考えを、どの語彙を用いてどのような文構造で語るのかという表現力の一部を指す)ではないことが推察される。しかしながら、近年、グローバル化が急速に進む中、自己表現力・自己発信力のある人材の育成が大学教育に対する社会的要請であり、プレゼンテーション教育においても情報整理力や思考形成力を養うような指導が行われるべきであり、そのためにもテキストにおいて準備段階の充実が図られなければならない。

6. 結論

本稿は、以下のことを明らかにした。第一に、大学英語プレゼンテーションでカバーされることが少ない項目が、既習と見なされる項目や、ブレインストーミングや下調べのような内容を充実させ、論理的に構成する上で重要となる項目、聴衆に合わせて調整するといったコミュニケーションにおいて基本となる項目であるということである。第二に、これらの項目を重視しないことが、優れた内容のプレゼンテーションが実現できない要因であることである。ここから、スキルを育成するとともに、情報整理力や思考形成力の育成にも力をいれることの必要性を示唆した。

日本の英語教育は、ここ数年で変化を続けている。小、中、高等学校の英語教育においてもコミュニケーション能力の養成に力が入られるようになってきた。2008年度に改訂された新学習指導要領では、グローバル化社会に対応するために、英語でのコミュニケーション能力の養成が掲げられ、小学校では、2011年度より、5、6年生の外国語活動が必修化され、中学校では、バランスのとれた4技能の習得をめざし、高校では、英語で行う英語授業が実施されることとなった。その結果、大学1年次は、すでにある程度オーラルコミュニケーション活動を経験している。したがって、大学では、その英語力を発揮し、さらに発展させるような機会を提供するべきであり、そこでは、情報整理力・思考形成力の育成こそが行われるべきである。これが、「真の国際人の育成」を目指す大学教育に貢献する英語プレゼンテーション教育のあるべき姿である。

引用文献

- Hovane, M. (2009). Teaching presentation skills for communicative purposes. 関西大学外国語教育フォーラム 8, 35-50, 関西大学
- Munby, I. (2011). The oral presentation: an EFL teacher's toolkit. 北海学園大学人文論集 (49), 143-168, 北海学園大学人文学会
- Otoshi, J. & Heffernan, N. (2008). Factors Predicting Effective Oral Presentations in EFL Classrooms. The Asian EFL Journal 10, 65-78
- Prentice, D. & Payne (1989). *Public speaking today!* Lincolnwood: National Textbook Company
- Tsue, N. & Kono, M. (2003). Speech activity for the development of rapport in the EFL

6) 調査から「文法 (grammar)」を扱っているテキストが少ない一方で、「有用な表現 (useful expressions)」を扱っているテキストが多かったことも明らかになったが、ここにも大学における語学教育の位置づけが、言語知識に比重を置く傾向があることが伺える。さらに、これはプレゼンテーションにおいては枠組 (雛形) が重要であるという認識が反映されているとも考えられる。言語表現に関する知識は、自らの考えを聴衆にわかりやすく伝えるための重要な手段であるが、これに注目しすぎると「内容」の指導はおろそかにされる可能性がある。

- classroom. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 25, 1-7, 秋田大学
- 飯田依子 (2012). 「プレゼンテーションはコミュニケーション能力向上に役立つか？」 The JASEC bulletin 21 (1), 23-132, 日本英語コミュニケーション学会
- 藤田玲子、山形亜子、竹中肇子 (2009). 「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」『人文自然科学論集』128, 35-53, 東京経済大学人文自然科学研究会
- 文部科学省 (2008). 小学校新学習指導要領 (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf). 2013 年 11 月 5 日取得 .
- 文部科学省 (2008). 中学校新学習指導要領 (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/icsFiles/afieldfile/2010/12/16/121504.pdf) . 2013 年 11 月 5 日取得 .
- 文部科学省 (2009). 高等学校新学習指導要領 (http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304427_002.pdf). 2013 年 11 月 5 日取得 .
- 中西雅之 (1991). 「スピーチ・コミュニケーションの英語教育への示唆-2-パブリック・スピーキング」『共立女子大学文芸学部紀要』37, 11-24.
- 佐藤智子 (2006). 「オーラル・プレゼンテーションを通じた英語 4 技能向上の試み」『言語と文化』8, 31-41, 岩手県立大学
- 仁科恭徳、桐村亮、吉村征洋 (2013). 「日本人英語学習者の自律学習方略に関する一考察：英・日プレゼンテーションの事前準備に関して」『明治学院大学教養教育センター紀要カルチュラル』7 (1), 97-111, 明治学院大学教養教育センター
- 立教大学 (2013). 2013 年度全学共通カリキュラム履修要項
- 上田孝子 (1998). 「大学英語教育にスピーチ、プレゼンテーションを取り入れる試み」『ことばと心理の学習』金星堂
- 吉岡知哉 (2013 年 4 月 8 日付). 2013 年度の初めにー立教大学の教職員の皆さまへー [電子メール]

Appendix 1

表 1 調査対象としたテキスト一覧

No.	英語タイトル	日本語タイトル	出版社	出版年
1	Academic Presentation	アカデミック・プレゼンテーション	三修社	2013
2	Power Presentation	英語でプレゼンテーション	三修社	2005
3	Presentation Workshop	DVD で学ぶ英語プレゼンテーションの技法	金星堂	2012
4	Speaking in Public	プレゼンテーションのための基礎英語	成美堂	2009
5	The Way to Effective Speaking	スピーチ・プレゼンテーション技法 (new ed.)	南雲堂	2010
6	Writing for Presentation in English	ライティングで学ぶ英語プレゼンテーションの基礎	南雲堂	2012
7	Your First Speech and Presentation	英語スピーチとプレゼンの技術	南雲堂	2011
8	Successful Presentations: An Interactive Guide		センゲージ	2012
9	Presentations in English: Find Your Voice as a Presenter		センゲージ	2011
10	Academic Presentation	一步進んだアカデミック英語プレゼン	マクミラン	2012
11	Presenting in English: How to Give Successful Presentations		マクミラン	2008
12	Speaking of Speech (New ed.)		マクミラン	2009
13	Dynamic Presentations	英語プレゼンテーションの秘訣	ピアソン	2007
14	English for Work: Business Presentations with CD		ピアソン	2003
15	Present Yourself 1/ 2		ケンブリッジ	2008
16	Dynamic Presentations		ケンブリッジ	2010
17	Express Series English for Presentations		オックスフォード	2007
18	Presentations to Go: Building Presentation Skills for Your Future Career	DVD で学ぶはじめての英語プレゼンテーション	センゲージ	2014

Appendix 2

表2 テキストが扱う項目一覧

No.	physical aspects		oral aspects		preparation				organization			visual aspects		Q&A	feedback/ evaluation	language	
	eye contact	gesture	posture	pronunciation	voice inflection/ intonation	brainstorming	outlining	researching	audience analysis	structure	transition/ signpost	type of presentation	creating			explaining	grammar
1	○	○	○	○	○	×	○	△	○	○	○	○	○	×	○	×	○
2	○	○	○	○	○	×	○	×	○	○	○	○	○	○	○	×	○
3	○	○	○	×	×	×	○	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	○	×	×	×	○
5	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	○
6	△	△	△	△	×	○	×	×	×	○	○	○	×	×	×	×	○
7	×	×	×	×	×	×	×	○	○	×	×	×	○	○	○	×	△
8	○	○	○	×	○	×	×	×	×	○	○	×	○	○	○	×	○
9	×	×	×	○	○	×	×	×	×	×	△	×	○	○	×	×	○
10	○	○	○	×	△	○	○	○	○	○	×	×	○	×	○	×	×
11	×	×	×	×	×	×	×	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
12	○	○	○	×	○	×	△	×	×	○	○	○	○	○	×	○	○
13	○	○	○	○	○	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
14	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	×	○	○
15	△	△	×	×	×	○	○	×	×	×	×	○	○	○	○	×	○
16	○	○	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○
17	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	×	○	○	○	○	○
18	△	△	△	×	△	○	○	×	×	×	×	×	○	○	○	×	○

(注)

○ 当該項目についての説明と練習用のエクササイズが掲載されている

△ 当該項目についての説明のみにとどまっているか、説明はないがその重要性が述べられている

×

Appendix 3

表3 主要テキストにおけるプレゼンテーション設定および章構成

No.	プレゼンテーションの設定	テキストの章構成	
		Skill-based	Content-based
1	Academic	✓	
2	Academic	✓	
3	Academic		✓
4	not mentioned ("overall English skills" "oral communication skills")		✓
5	not mentioned ("any speaking situation")	✓	
6	not mentioned (「グローバル化が進む社会において、 …人前で情報を伝えたり、自分の考えを説明する」)		✓
7	Business		✓
8	not mentioned ("standing up in front of people, explaining your information")		✓
9	"conferences or meetings"	✓	
10	"both academic and business"	✓	
11	"anyone who needs to make presentations in English"	✓	
12	not mentioned	✓	
13	not mentioned ("to present their own ideas clearly and effectively")	✓	
14	Business	✓	
15	not mentioned	✓	
16	Business	✓	
17	Business	✓	
18	Business		✓